

# 平安期物語における継子譚受容

香川高等専門学校 森 あかね

## 凡例

一 本文の引用は左記のとおりである。なお、本文に付した傍線は全て稿者による。

『うつほ物語』『源氏物語』…新編日本古典文学全集(小学館)

『続日本紀』『落窪物語』『今昔物語集』『注好選』…新日本古典文学大系(岩波書店)

『令義解』…国史大系(吉川弘文館)

『蒙求』…池田利夫編『蒙求古註集成』(汲古書院 一九八八〜一九九〇年)

『孝子伝』…幼学の会『孝子伝注解』(汲古書院 二〇〇三年)

二 引用に関して、旧字体は新字体に改めた。

## 一 はじめに

継子譚は世界的に多数の例が認められる話型であるが、日本においても平安期の物語にこの話型の組み込み例が見られる。従来の研究の中心となったものは継子が女であるパターン(シンデレラ型)の話であり、『うつほ物語』や『源氏物語』光源氏などの継子が男のパターンは「変型」と扱われてきた。しかし、継子が男のパターンは漢土における孝子説話の形をとる継子譚に多くの例が見られる。

本発表は大陸伝来の継子譚、特に漢土の継子譚である孝子説話型の継子譚を中心として、平安期の物語における表現を支える一つの素材としての関わりを検討することを目的とする。

※継子譚・・・「継母子という人間関係を基に展開する話」

## 二 継子譚における研究史

資料一 山室静『世界のシンデレラ物語』(新潮社 一九七九年)

シンデレラという話は、虐げられた境遇にある継娘が、天性の美貌と淑やかさと才覚によって、また何らかの超自然的な援助者(亡母の霊或いは身代りの妖精や小鳥のケースが多い)によって、幸福な結婚をするまでの経緯を辿った話とすることができる。

資料二 継子譚の広がりについての説

・本来的に人間の思考方法や発想が共通しており、生活形態も大きな変わりはないために、各地で類似した話が偶発的に発生し、伝承されてきた。

・原話となる形があり、それが民族の移動によって、変化をもたらしながら世界各地に広がったというもので

※日本の継子譚の話型は、貴種流離譚から派生したものとされる一般的見解。時代の流れで継母子という関係が生じたために継子譚に移行したという考え。

資料三『源氏物語』[蜚]二二六頁)

継母の腹きたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしと思せば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにも描かせたまひける。

↓平安時代における継子物語の流行を示唆。現存以外にも多数の物語があった。

資料四 朝倉治彦、井之口章次、岡野弘彦、松前健編『神話伝説辞典』(東京堂出版 一九六三年)

文学と習俗は必ずしも一致しているわけではなく、継母継子の家庭問題が起らぬ以前から、日本では継子いじめの物語が現われた。この物語の見えそめた平安期の夫婦関係からも継母が継子をいじめるところとはあり得ない。(中略) 現実には継母の継子いじめは存在しないで、宗教の方便として盛んにとりいれられた外来のまま子いじめの説話が一般になじんで、おのずとふり変わったものと見るべきである。

資料五 日向一雅「継母子譚」(林田孝和、原岡文子他編『源氏物語事典』大和書房 二〇〇二年)

継母子譚は継母から迫害された継子の姫君が男君によつて救われ、幸福な結婚をして栄えるというモチーフの物語である。シンデレラ・ストーリーとして世界的に普遍的な話型であり、昔話の類話も枚挙にいとまがない。(中略)『源氏物語』の継母子譚は空蟬と紀伊守、藤壺中宮と光源氏、弘徽殿太后と光源氏のように継子を男子とする場合、また常陸介と浮舟のように継父の継子いじめのような変型があり、独自のテーマを担う。

↓男の継子の例として、『宇津保物語』「忠こそ」、『今昔物語集』卷第十九「亀報山陰中納言恩語 第二十九」、卷第二十六「陸奥国府官大夫介子語 第五」がある。大陸伝来の例を入れると更に増える。

資料六 日本の「孝」受容

部内ニ有<sup>ラバ</sup>下好<sup>ラ</sup>学、篤道、孝悌、忠信、清白、異行、発<sup>レ</sup>ニ聞<sup>エタル</sup>於郷閭<sup>ニ</sup>一者上、拳<sup>コシテ</sup>而進<sup>メヨ</sup>之。(『令義解』卷二 戸令)

学者兼<sup>テ</sup>習<sup>フ</sup>之。(中略) 孝経。論語ハ皆須<sup>シ</sup>ニ兼<sup>テ</sup>通<sup>ス</sup>一。(『令義解』卷三「学令」)

凡<sup>レ</sup>孝子、順孫、義夫、節婦、志行聞<sup>エハ</sup>ニ於国郡<sup>ニ</sup>一者、申<sup>セ</sup>ニ太政官<sup>ニ</sup>一。奏聞<sup>シテ</sup>表<sup>セヨ</sup>其門閭<sup>ニ</sup>一、同籍<sup>ハ</sup>悉<sup>ニ</sup>免<sup>セ</sup>ニ課役<sup>ヲ</sup>一。有<sup>ラハ</sup>ニ精誠<sup>ノ</sup>通感<sup>スル</sup>コト一者、別<sup>ニ</sup>加<sup>ヘヨ</sup>ニ優賞<sup>ヲ</sup>一。(『令義解』卷三 賦役令)

乙卯、詔したまはく、「上は曾祖より下は亥孫に至るまでに、奕世孝順なる者には、戸を挙りて復を給ひ、門閭に表旌して義家とす」とのたまふ。(『続日本紀』大宝二年十月)

治<sup>メ</sup>民<sup>ヲ</sup>安<sup>スル</sup>ハ<sup>レ</sup>国<sup>ヲ</sup>必<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>孝<sup>ヲ</sup>理<sup>サム</sup>。百行ノ之本莫<sup>シ</sup>レ先<sup>ナル</sup>ハ<sup>ニ</sup>於茲<sup>ヨリ</sup>一。宜<sup>ク</sup>下<sup>シテ</sup>令<sup>シテ</sup>天下<sup>ヲ</sup>一、家<sup>コト</sup>藏<sup>メテ</sup>孝経一本<sup>ヲ</sup>一、精勤誦習<sup>シ</sup>、倍<sup>マ</sup>加<sup>フ</sup>中教授<sup>ヲ</sup>上。百姓ノ間ニ有<sup>ラハ</sup>ニ孝行通<sup>シテ</sup>人<sup>ニ</sup>一、郷閭欽仰<sup>スル</sup>者<sup>ニ</sup>一。宜<sup>ク</sup>レ令<sup>ニ</sup>所由<sup>ノ</sup>長官<sup>ヲ</sup>一、具<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>名<sup>ヲ</sup>薦<sup>メ</sup>一。(『続日本紀』天平宝字元年四月)

資料七 『令義解』(卷三・賦役令)「孝子、順孫」注釈に

謂、高柴泣<sup>レ</sup>血三年。願<sup>悌</sup>絶漿、五日之類、孝子也。原毅喻<sup>レ</sup>父迎<sup>レ</sup>祖。劉殷冒<sup>レ</sup>雪獲<sup>レ</sup>芹之類、順孫也。

『令義解』卷三・賦役令)

↓「孝」は平安時代官人の必須の知識であり、孝子説話が受容された。その中で孝子説話型の継子譚が受容され、平安期の物語の表現に繋がるのではないか。

### 三 『落窪物語』の受容

「落窪物語」・・・継母による継子迫害↓男君の救出↓報復↓孝養

資料八

① 継子は継母へ孝を示す  
舜譚(『孟子』、『史記』、『孝子伝』、『注好選』、『宝物集』など)、王祥譚(『搜神記』、『晋書』、『孝子伝』、『芸文類聚』、『注好選』など)、閔子騫譚(『蒙求』、『芸文類聚』、『孝子伝』、『注好選』など)、申生譚(『史記』、『列女伝』、『孝子伝』、『今昔物語集』など)、「蔣詡」(『孝子伝』、『東觀漢記』)、※クナラ太子譚(『阿育王経』、『大唐西域記』、『今昔物語集』など)(注9)、『今昔物語集』卷十九「亀報山陰中納言恩語第二十九」、『うつほ物語』忠こそその物語

② 継母が報復を受ける

伯奇譚(『漢書』、『後漢書』、『孝子伝』、『注好選』、『今昔物語集』など)、『今昔物語集』卷第二十六「陸奥国府官大夫介子語第五」、『住吉物語』、「葉限」、『西陽雜俎』

③ 継子の繁栄が語られ、継母との関係は語られない

『注好選』「胡楊は鎗を免る 第九十」、『今昔物語集』卷二「薄狗羅、得善報語第(二十)」

資料九 『落窪物語』(卷三 一九五頁)

「この渡らんとし給所は三条にこそありけれ。又まつと聞こえし物をとし比造りて、渡らんとし給らんに妨げたらんはいかにおぼすらん。親の嘆き給らんは罪いとおそろしく、仕ふまつる人たゝこそあれ、かくし給ことを妨げ給へば、嘆かせたてまつるが心うき事。衛門がする事ぞ。」  
と、いとをしとおぼしたるけしきにてのたまへば、

「天下の親にてをのが家をし取らるゝ人やある。嘆き給らん罪はのちにもいとよく仕うまつりなをし給へ。渡らじとおぼすとも、まろ、子たち具して渡りなん。かく言ひ立ちてとどまりたらんいとおこならん。かの家たてまつらんとおぼさば、知られたてまつりてのちをたてまつり給へ。」

資料一〇 『落窪物語』(卷三 二一九頁)

「あはれ、中納言こそいたく老いにけれ。世人は老いたる親のためにする孝こそいとけうありと思ふ事は、七十や六十なる年、賀と言ひて遊び、樂をして見せ給、又若菜まいるとて年のはじめにする事、さて八講と言ひて、経、仏かき供養する事こそはあめれ。さまぐめづらしきやうにせんとてはいかなる事せん。生きながら四十九日する人はあれど、子のするにては便なかるべし。これらが中にのたまへ。せんとおぼさん事せさせたてまつらん。」  
と申給へば、女君、いとうれしとおぼして、

「樂はげにをもしろくをかしき事にこそあれど、のちの世まで御身に益なし。四十九日はげにゆゝしかるべし。八講なむこの世もいとたうとく、のちのためめめでたくあるべければ、して聞かせたてまつらまほしき」

↓「孝」として、父親への法華八講を行なう。

資料一一 『落窪物語』(卷四 二二九頁)

頼もしげなくなり果て給て、生ける時処分してん、子どもの心見るに、はらから思ひせず、女立の中にも

疎くしくあめれば、論なうらみごとどもいで来なん、とて、越前守をおまへに呼び据へて、所ぐの庄の券、おびなど取りいでてえらせ給に、すこしよろしきはたゞ大将殿の北の方にのみたてまつり給て、「異子ども、これうらやましとだに思ふべからず。おなじやうに力入り、親に孝したるなし。すこし人ノしきになんよろしきもの取らす。言はんやこゝらのとしごろ返り見るを恩にやと思へ。」といとさかしうのたまふを、きんだちはことほりとおぼしたる。

「この家も古りてこそあめれど、広うよろしき所なり。」

とて大将殿の北の方にたてまつり給へば、北の方聞きて泣きぬ。

↓「孝」を理由に、財産・家を分与。女君が中納言家を相続することに。

○『落窪物語』の孝養譚は、孝子説話型の継子譚に基づくもの。れは一連の流れの決着部分として、物語全体に機能する。

#### 四 うつほ物語「忠こそ」の受容

左大臣北の方（継母）が忠こそに対して、愛欲の心を抱く。↓忠こそが拒否したため、継母が姦計をめぐらせる。↓父の不興を買い、忠こそは家出し出家。↓後に落ちぶれた継母と再会、世話を焼く。

資料一二 三木雅博『うつほ物語』忠こそ（継子いじめ譚）の位相―『孝子伝』の伯奇譚・クナラ太子譚との比較から（『国語国文』七三十一号 二〇〇四年一月）

『うつほ』作者は、『孝子伝』に孝養奇端譚と（継子いじめ譚）とが併せて載せられていることに注目して、仲忠の物語と対比させるべく、忠こそ（物語の基本的な構造を『孝子伝』の伯奇譚に仰ぎながら、さらに平安前期当時の貴族社会の家族関係を見据えて、継子迫害の要因の部分については、インド起源のクナラ太子譚の、継母邪恋の話形を用いていたのではないか。

↓『うつほ物語』忠こそ（物語）・インドの継子譚クナラ太子譚＋孝子説話型継子譚の伯奇譚

資料一三 『孝子伝』「伯奇」陽明文庫本

伯奇は周の丞相伊吉甫の子なり。人と為り慈孝なり。而して後母一男を生み、仍りて伯奇を憎み嫉む。乃ち毒蛇を取りて瓶中に納れ、伯奇を呼びて、將に小児を殺さんと戯る。少兒蛇を畏れ、便ち大いに驚き叫ぶ。①母吉甫に語りて曰わく、伯奇常に我が小児を殺さむと欲す。君若し信ぜざれば、試みに其の所に往きて之を看よと。果たして之を見るに、伯奇、瓶の蛇在り。又①讒言すらく、伯奇乃ち我に非法をせんと欲すと。②父云わく、我が子、人と為り慈孝、豈此くの如き事有らむやと。母曰わく、君若し信ぜざれば、伯奇をして後園に向かい菜を取らしめ、君密かに之を窺うべしと。母先ず蜂を賣ちて衣の袖の中に置く。母、伯奇の辺りに至りて白さく、蜂我を螫すと。即ち地に倒れ、伯奇をして除くことを為さしむ。奇即ち頭を低くして之を捨つ。母即ち還りて吉甫に白さく、君伺い見るや否やと。父因りて之を信じ、③乃ち伯奇を呼びて曰わく、汝の父の爲め、上天に慙じず、後母を娶ること此くの如しと。伯奇之を聞き、嘿然として氣無し。因りて自ら殞せんと欲す。人有り之に勧め、乃ち他国に奔らしむ。④父後に審定し、母の奸詐を知り、乃ち素車、白馬を以つて伯奇を追い、津の所に至り向かい、津の吏に曰いて曰わく、向に童子の赤白美兒なる、津の所に至るを見るやいなやと。吏曰わく、童子、向者にして度りて河中に至り、天を仰ぎて歎じて曰わく、瓢風起こり素衣を吹く、世の乱れに遭いて帰する所無し、心鬱血し屈して申びず、蜂の厄の爲め即ち我が身を滅ぼすと。歌い訖わり乃ち④水に投じて死すと。父之を聞き、遂に悲泣して曰わく、我が子枉げらるるかなと。即ち河の上に之を祭るに、飛鳥有りて来たる。父曰わく、若し是れ

我が子伯奇ならば、吾が懐に入れと。鳥即ち其の手に飛び上り、懐中に入りて袖より出づ。父の曰わく、是れ伯奇ならば、当に吾が車に上り、吾に随いて還るべきなりと。鳥即ち車に上り、随いて家に還り到る。母便ち出で迎えて曰わく、向に君が車を見るに、上に悪鳥有り。何ぞ之を射殺さざると。⑤父即ち弓を張り矢を取り、便ち其の後母を射るに、腹に中たりて死す。父罵りて曰わく、誰か我が子を殺さむやと。⑥鳥即ち後母の頭に飛び上り、其の目を啄む。今の世の鵝鳥是なり。一名はく。其の生める児、還りて母を食らう。詩に云わく、我を知る者は、我が心憂うと謂う。悠々たる蒼天、此れ何人ぞやと。此れは之を謂うなり。其の弟、名は西奇なり。(「伯奇」陽明本書き下し文)

資料一四『うつほ物語』「忠こそ」との対応

①継母による二度の讒言。

②一度目、父は子を信じるが、二度目は信じられない。

③父の不信により継子は家を出る。

④事情を知った父は子を探し求めるが、再会できない。

⑤父の行動をきっかけとして、継母が罰を受ける。

↓この後に他の孝子説話型の継子譚同様の孝養へ移行。

○忠こそその物語と伯奇譚は、基本的展開は確かに重なり合う。この構成に継母の邪恋を契機とするクナラ太子譚、更に『落窪物語』の例で見たような継母への孝養要素を組み合わせる。

## 五 『源氏物語』光源氏における物語の受容

弘徽殿女御（継母）の光源氏への憎しみ↓政治的迫害↓父の霊による救出↓弘徽殿女御に丁重に仕える。

資料一五 日向一雅『源氏物語』と継子譚（『源氏物語の主題：「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社一九八三年）

源氏物語は継子関係が継子いじめに展開する必然性を、後妻妬みの導入によって打ちかためたのである。それは継子関係の葛藤をより全円的に構築する方法であった。

資料一六『源氏物語』「桐壺」

この皇子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この皇子のみたまふべきなめりと、一の皇子の女御は思し疑へり。(「桐壺」一九頁)

せむ方なう悲しう思さるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。「の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほし出でつゝ、(「桐壺」二六頁)

明くる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また、世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく思し憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかり思したれど限りこそありけれ」と世人も聞こえ、女御も御心落ちゐたまひぬ。(中略)「今は、

誰も誰もえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。(「桐壺」三七頁)

↓一の皇子の立太子に対する不安が、弘徽殿女御の憎しみの始まり。一の皇子、また右大臣一家の立場を揺るがす異端者に対する危機感。

資料一七 孝子説話型の継子譚の始発

伯奇は周の丞相伊尹吉甫の子なり。人と為り慈孝なり。而して後母一男を生み、仍りて伯奇を憎み嫉む。  
『孝子伝』陽明本「伯奇」

「時に母に二子を生ぜり。其の後、母牛の糞を蔵せり。」(『注好選』上「閔騫は母が去るを還し留む 第四十七」)

申生は晋の献公の子なり。兄弟三人あり、中は重耳、少は夷吾なり。母は齊姜と曰い、早く亡す。而して申生至孝なり。父麗戎を伐ち、女一人を得、(中略)名づけて麗姫と曰う、姫子を生み、名づけて奚齊卓子と曰う。姫妬みの心を懐き、其の子畜を立てて以つて家嫡と為さんと欲す。(『孝子伝』陽明本「申生」)

資料一八 三木雅博『「うつほ物語」忠こそその〈継子いじめ譚〉の位相―『孝子伝』の伯奇譚・クナラ太子譚との比較から』(『国語国文』七三一―号 二〇〇四年一月)

中国の〈継子いじめ譚〉が、継母の実子の誕生と継子への迫害を関連づけて語る背景には、基本的には第一子の男子が家督を相続する―土地・財産などは第二子以降にも少しずつ分け与えられたが、全体的な家財、土地の大部分や家族の監督権は長子から長子へと相続された―中国の家督相続制度があるものと考えられている。継母の迫害の根本には、長子であり家を継ぐ権利を持つ継子がいる限り、自らの実子を決して婚家の後継者にしてやることのできない、継母の切ない親としての情が横たわっていたのであろう。

↓家の安泰に基づく迫害は、大陸伝来の継子譚における典型的設定。弘徽殿女御の迫害の発端と重なる。

資料一九 『源氏物語』「明石」

故院ただおはしまししまながら立ちたまひて、「などかくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて引き立てたまふ。「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」とのたまはず。(中略)いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど

睨みたまひしに見合はせたまふと見しけにや、御目にわづらひたまひてたへがたう悩みたまふ。(中略)大宮もそこはかとなうわづらひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内裏に思し嘆くことさまざまなり。

↓桐壺院の霊による光源氏の救出。弘徽殿女御。朱雀帝は病に。

資料二〇

○父による救出

父察して密かに之を知り、後母を遣らんと欲す(『蒙求』「閔損衣單」)

父曰わく、若し是れ我が子伯奇ならば、吾が懐に入れと。鳥即ち其の手に飛び上り、懐中に入りて袖より出づ。父の曰わく、是れ伯奇ならば、当に吾が車に上り、吾に随いて還るべきなりと。鳥即ち車に上り、随いて家に還り到る。母便ち出で迎えて曰わく、向に君が車を見るに、上に悪鳥有り。何ぞ之を射殺さざると。父即ち弓を張り矢を取り、便ち其の後母を射るに、腹に中たりて死す。父罵りて曰わく、誰が我が子を殺さむやと。(『孝子伝』陽明本「伯奇」)

○超自然的力による救出。

呉の時の人、司空公の王祥は至孝なり。母魚を食するを好み、其れ恒に供え足らす。忽ちに氷の結ぶに遇う。祥乃ち氷を積きて泣く。魚便ち出でて氷上に躍る。故に曰わく、孝天地を感ぜしめ、神明に通ずるなりと。(『孝子伝』陽明本「王祥」)

後母之を嫉むこと之更に甚し。乃ち密かに毒薬を以つて詔に飲ましむ。詔之を食するも死せず。又刀を持つて之を殺さんと欲す。詔夜夢みて驚きて起ちて曰わく、人の我を殺さんとする事有り。乃ち眠る処を避く。母果たして刀を持って之を斫る。乃ち空地に著く。母後に悔悟して、退きて責めて歎じて曰わく、此の子は天の生む所なり。(『孝子伝』陽明本「蔣詔」)

○父親・超自然的力による救出

大王高樓ニ在マシテ髣ニ此ノ琴ノ音ヲ聞給フニ、我ガ子ノ物那羅太子ノ引給ヒシ琴ニ似タリ。然レバ使ヲ遣シテ、(『今昔物語集』巻第四「物拏羅太子抉眼、依法力得眼語 第四」)

↓父親、超自然的力が継子を救出するという共通要素。父である桐壺院が夢に現れ、光源氏を住吉神の救出へと導く『源氏物語』の展開との類似。

資料二一『源氏物語』「濡標」

大后は、うきものは世なりけりと思し嘆く。大臣は事にふれて、いと恥づかしげに仕まつり心寄せきこえたまふも、なかないとほしげなるを、人もやすからず聞こえけり。(『濡標』三〇一頁)

↓弘徽殿女御に関する報復は描かれず、丁重に仕える光源氏。継母に孝をつくす継子の姿と重なる。

○光源氏の物語構成は継娘物語の変容ではなく、継息子の物語として位置付けられる。大陸伝来の継子譚がその表現を支える。

六 まとめ

平安期において、「継母による継子いじめ」という固定観念の生成の背景としては、大陸伝来の継子譚の関与が想定される。大陸伝来の継子譚の中で、特に注目されるのは孝の賛美を目的とした孝子説話型の継子譚である。孝子説話は、説話集、注釈書、漢詩、和歌と多方面に引用された素材であつて、物語の中にも引用や構成上の影響を及ぼしている。つまり、文学知識としての孝子説話の延長上に、孝子説話型の継子譚における受容を位置づけることができるのである。